
蛮人

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛮人

【Nコード】

N4224V

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ある漫画原作者が飯がまずいと店の中で暴れ回っていた。その悪事が世に知られた原作者の末路は。まずいならまずいで店の中で怒鳴り散らす某漫画の主人公達の行動に思うところがあり書いた作品です。

第一章

蛮人

その客を見てだ。誰もが顔を顰めさせた。

「何だ、あいつは」

「黙って食えよ」

「まずいならまずいでな」

「そんなことするなよ」

こう言い合う。その客は店の中で喚き散らしていたのだ。

「まずいぞ！」

「こんな飯客に食わせるな！」

「ふざけるな、これで金取ってるのか！」

「店の人間が選ぶな！」

こうだ。周りのことを考えず喚いていた。

店の者が慌てて出て来るとだ。その店の者にだ。

「御前等これでも料理で生きているのか！」

「あの、そうですが」

「ですが」

「ですが。何だ？」

見ればだ。似合わない口髭をした貧相な顔立ちの男だ。目は小さくそこには嫌らしい光がある。身体もひよろりとしていて服も何か汚らしいものである。高価な服だがそれでもそこには汚らしいものがあつた。

その彼がだ。こう言つのだつた。

「口ごたえするのか、客に」

「あの、他のお客様に迷惑がかかりますので」

「店の中で騒ぐのはです」

「お止め下さいますか？」

「こんなまずい飯食ってる客に遠慮なぞするか！」

今度はこんなことを言うのだった。

「味のわからない奴にはな！」

「おいおい、何だよこいつ」

「頭いかれてるのか？」

「まずいならまずいで食うなつての」

「全くだ」

客達も呆れていた。しかしだった。

男は彼等にも顔を向けてだ。また言った。

「おい、こんな飯美味いと思うのか」

「だからあんたなあ」

「店の中で喚くなつての」

「それ位常識だろ？」

「違うか？」

「ふん、味のわからない奴には何を言っても無駄だな」

男の傲慢、いや下品な態度は変わらない。今度は店の椅子を蹴飛ばした。それによって椅子は床に転がり乾いた音を立てた。

だがその音よりもだ。男の罵声が響くのがだった。

「こんな店があるつてな。書いておくか」

「何だ、こいつ小説家か？」

「それとも記者か？」

「何なんだ？」

「俺は漫画原作者の糟屋送だ」

男は誇らしげに語った。

「覚えておけ」

「ああ、あの美食漫画のか」

「あの原作者だったのかよ」

「俺に文句があるなら出版社に言え」

今度はこんなことを言うのだった。

「わかつたな」

「一応抗議しておくか」

「そうだな」

「ここは」

こうしてだった。彼等は一応は糟屋がその原作を担当している雑誌を出している出版社に抗議していた。しかしであった。

その漫画は出版社の看板の一つになっていた。その漫画の売り上げは非常に大きなものであった。そのせいで出版社も糟屋を切れなかった。

それをいいことにだ。糟屋はさらに増長した。

「日本は謝れ」

「日本は悪いことをしたんだ」

「化学調味料は使うな」

「大企業は駄目だ」

「日本の経済侵略を許すな」

こんな言葉をその漫画で登場人物達に言わせた。無論それを読みその通りだと考える者も出て来ていた。影響は大きかった。

第二章

そしてそれをいいことにだ。彼は他の漫画にもあれこれ口を出す。まるで帝王の様にふんぞり返りだ。やりたい放題を重ねていた。

贅沢を極め美食の限りを尽くしていた。そして最高級のフランス料理店に入ってもだ。その態度は相変わらずなのであった。

「おい、この料理は何だ」

「御気に召されませんでしたか」

「作り直せ！」

こう喚いてだ。何と料理、キャビアやフォアグラのそれを作ったシェフに対して投げ付けたのである。白いエプロンが忽ちのうちに汚れる。

そして肉を床に落として踏みつけてだ。こう喚くのだった。

「こんなものを人に食わせるな！」

「あの、お客様」

「俺に口ごたえするのか！」

今度はシェフの胸倉を掴んできた。静かで落ち着いた、上品そのものの雰囲気のお店はこれで何もかもが変わってしまった。

「料理人風情が！」

「あの、ですから食べ物」

「まずい食い物に食う価値なんてないんだよ！」

こう言って今度はワインを手に取る。無論最高級のものだ。

それをシェフに頭から浴びせた。シェフは今度は赤く汚れてしまった。

そうしてからだ。まだ言うのであった。

「こんなのだから日本は駄目なんだよ！」

豪華なテーブルを蹴飛ばしそして暴れ回るのだった。こんなことを繰り返していた。

そんな彼を内心誰もが忌み嫌っていた。しかし彼は人気漫画の原

作者であり権力も持っている。誰も彼には逆らえなかった。

だがそんなことを繰り返していてだ。あるイタリア料理店でだ。

また喚き散らし暴れていてだ。そこにいたイタリア人達が顔を顰めさせて言い合った。

「何だ、あいつは」

「野蛮人か？」

「まずいならまずいでいいのに」

「あんなに騒いで」

「ここは本当に日本なのだろうか」

「何処かの野蛮な未開の地だろうか」

こんなことまで話すのだった。

「あれは酷いな」

「全くだ。おい、ここは」

「ああ、どうするんだ？」

「注意するか？」

「狂人には何を言っても無駄だ」

それは駄目だとだ。一人が言った。

「だからそれよりもな」

「ああ、それよりも？」

「もつといい考えがあるんだな」

「それは何だ？」

「これだよ」

イタリア人の一人があるものを出してきた。それは。

携帯電話であった。それを仲間達に見せるのだった。

「これであいつの今の様子を撮ってたな」

「ああ、どうするんだ？」

「それで」

「これをネットの動画に流すんだよ。日本じゃ最近それが流行ってるらしいからな」

それで官房長官の悪事が露呈したこともある。この官房長官の下

劣で卑しい人間性も同時に露わになってしまったのである。

「だからそれでいいだろ」

「そうだな。観る奴が観ればな」

「それであいつにもいい薬だな」

「そうしような」

こうしてだった。糟屋のその暴れ回る姿が撮られ動画サイトに流された。あるイタリア料理店で暴れ回る野蛮人という題名でだ。それが流されたのであった。

それを見てだ。多くの者が激昂した。

「何だ、この動画」

「これ日本だよな」

「ああ、日本だ。間違いない」

「俺この店知ってるぞ」

ネットでだ。すぐにこう書く者が出て来た。

「この店だろ」

すぐにその店のサイトが貼られた。そこにある内装の写真をみるとだ。

「ああ、この店だな」

「間違いないな」

「じゃあ日本だったんだな」

「間違いないな」

このことが確かめられるのだった。

第三章

「日本か」

「じゃあこいつ日本人か」

「顔見ればそうだな。アジア系だしな」

「それに喚いている言葉な」

「暴れてるからわかりにくいけれどな」

それでもだというのだ。よく聞いて検証しているとだ。それは。

「日本語だな」

「何かまずいとか作り直せとか言ってるな」

「ああ、ちゃんと言ってるな」

「間違いない」

それが話されるのだった。

「これってな」

「じゃあこいつ日本人か」

「それで誰だ？こいつ。ここ高級レストランだぞ」

このことが指摘された。

「金持ちが行く店だからな」

「じゃあこいつ金持ちか」

「それにしちや下品だな」

「成金じゃないのか？」

古い言葉での指摘が出て来た。

「小金持って有頂天になってる奴じゃないのか？」

「そんな奴か」

「こいつは」

「それで誰だろうな」

具体的に暴れている人間が誰なのかという検証がはじまった。

「こいつな」

「金持っててここまで下品な奴な」

「一体誰だ？」

「こう考えていくとだった。するとだ。ここでまた一人が言った。」

「ああ、こいつ漫画原作者の糟屋じゃないのか？」

「あの出て来る奴が偉そうに店でご高説たれる漫画だな」

「変な政治主張ばかり入ってる」

「美味しいもの食いまくりながら上から目線でお説教言つ」

「あの漫画か」

「こう書かれていってだった。」

「何だ、原作者こんな奴だったのかよ」

「漫画の登場人物そのままだな」

「ああ、品のない奴だな」

「野蛮人だな」

「この言葉も書かれた。」

「最低だな、こいつ」

「っていうか店で暴れるなよ」

「常識ねえのかよ、何処の馬鹿だよ」

「無教養な奴だな」

「糟屋への評価がネットで定まってきた。」

「こんな奴飯食う資格ないな」

「っていうかもつあの漫画読むの止めようぜ」

「こんな漫画雑誌で連載させるなよな」

「だよな。貴重な森林資源の無駄だよ」

「紙だつて資源使うんだからな」

「書き込みがさらに過激になっていっていた。そしてだ。この書き込みが入った。」

「これ、ネット中に広めようぜ」

「ああ、こんな奴許せるか」

「ふざけやがってよ」

「それである漫画連載中止に追い込もうぜ」

「不買運動だ、雑誌ごとな」

「それで出版社や編集部に抗議だ」

次第に現実への行動になっていく。

「見てろ、こんな奴」

「社会的に抹殺してやる」

「天誅だ、天誅」

「思い上がるのもいい加減にしやがれ」

こうしてだ。実際に糟屋の動画はネット中に広まり巨大掲示板でも話題になった。それがマスコミにまで飛び火し週刊誌にも載った。

第四章

『あの有名グルメ漫画原作者の呆れた実態』

『料理がまずいと暴れ回る野蛮人』

『こんな男があゝの漫画の原作者』

『ご高説を垂れる美食家のお見事な正体』

こんなセンサーショナルな見出しで週刊誌でも話題になった。そして。

出版社には抗議の電話が殺到し雑誌も単行本も発行部数が激減した。それを受けて漫画は見事連載打ち切りとなった。

そして糟屋は漫画界から追い出され権力も失った。次にはだ。

彼が暴れ回った多くの店からだ。裁判の訴訟が来た。営業妨害や暴行がその訴訟の理由だ。

裁判は一件や二件ではなかった。数十件とあった。その裁判費用もかかったが裁判に全て負けてだ。遂に破産し家も差し押さえられた。

家族からは見放されまたこれまでの倣岸不遜な態度から周りには取り巻きしかいなかった。取り巻きはその対象が落ちぶれば離れるものだ。

こうして糟屋は完全に破滅した。そしてだ。

破滅した彼は今ではだ。

みすばらしい格好で街を彷徨いだ。ゴミ箱を漁っていた。その彼を見てだ。

かつてネットで彼を攻撃していた若者達だ。指差してこう言うのだった。

「ああなつたら人間おしまいだな」

「そうだな。あんなに羽振りがよかったのにな」

「因果応報っていうかな」

「ざま見ろ」

そんな彼等の言葉を聞いてだ。糟屋は。

怒り狂ってだ。彼等に襲い掛かろうとした。

「御前等のせいだ！」

こつ喚いてだ。殴りかかろうとする。だが。

こつこつまづいてだ。倒れてだった。頭をぶつけた。

そして転がったところでゴミ箱を転がして頭からその中のゴミを被るのだった。そうしてだった。

そのゴミ箱を置いてある店の親父からだ。忌々しげに言われた。

「あんたそれなおしておけよ」

「何！？俺を誰だと思ってるんだ」

「頭の悪い馬鹿だろ」

これが店の親父の糟屋への評価だった。

「それ以外の何だっていうんだ」

「誰が馬鹿だつてんだ」

「そこに汚らしいもつけようか？」

完全に侮蔑した言葉だった。

「そうしてやるうか？」

「手前、この俺を」

「わかつたらさっさとゴミを元に戻せ」

親父は糟屋が何かを言おうとする前に言った。

「いいな」

「糞っ……」

「全く。品のない奴だよ」

親父は糟屋を知らない。だがこつ言っただけだった。

「何処の誰か知らないけれどな」

こつ言っただけだった。彼にゴミをなおさせるのだった。

「碌な生き方してないんだろな」

「何っ、俺を誰だと」

「だから最低の屑だろ」

これが親父の見るところだった。

「そうだろ。顔を見ればわかるよ」

「俺の顔をだと」

「人間な、生き方が顔に出るんだよ」

そのことを言うのだった。彼のその顔を見ながら。

「目にもな。御前の顔は卑しいし目の光も濁って澱んでる」

「そうだといいのだ。」

「ヤクザかゴロツキだな。そうだろ」

「俺はな、あの漫画のな」

「ほら、さっさとゴミをなおせ」

親父は糟屋の言葉を聞こうとしない。聞く価値もないというのだ。

「いいな」

「くっ……」

こうしてだった。糟屋は親父にゴミをなおさせられた。それを見た者達は彼を嘲笑い言うのだった。

「因果応報だな」

「全くだよ」

こう言って嘲笑するのだった。これが彼の末路だった。そして一年後。

道で行き倒れの死骸があった。死因は餓死だった。みすばらしい身なりと顔のその男が誰なのかはわからなかった。しかしその死骸が餓死だったのはわかった。糟屋の姿を見た者はそれ以降いなかった。このことも確かなことだった。そしてそれを悲しむ者も残念に思う者もなかった。誰一人として。

蛮人 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4224v/>

蛮人

2011年8月2日03時28分発行